

京都大学大学院教育学研究科
教授

西岡加名恵

にしおか・かなえ ● 英国バーミンガム大学にてPh.D. (Ed.)取得。鳴門教育大学講師、京都大学助教授・准教授を経て現職。専門は教育方法学(カリキュラム論、教育評価論)。日本教育方法学会常任理事、日本カリキュラム学会理事。文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」委員などを歴任。著書に「新しい教育評価入門」(編著、有斐閣)、「教科と総合学習のカリキュラム設計」(図書文化)、「「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価」(編著、明治図書)など。

Interview

探究をどう捉え、 どのような評価観を もつべきか

「探究についてなんとなくわかってきた。けれど、どう評価していいかわからない」という声をよく耳にします。そこで、ポートフォリオやパフォーマンス課題を活用した新しい評価手法について、また、探究における評価観について、教育評価を専門とする京都大学大学院の西岡加名恵教授に伺いました。

課題に注目するだけでも
探究の質の深まりが見えてくる

評価とは、生徒の学習の実態を捉え、それを踏まえて指導の改善を図る営みです。つまり、何のための評価かと言えば教育活動を改善するためですから、先生方が「評価疲れ」を起こし、指導を改善する余力がなくなるとは本末転倒です。反対に、的確に指導できている実感があるならば、生

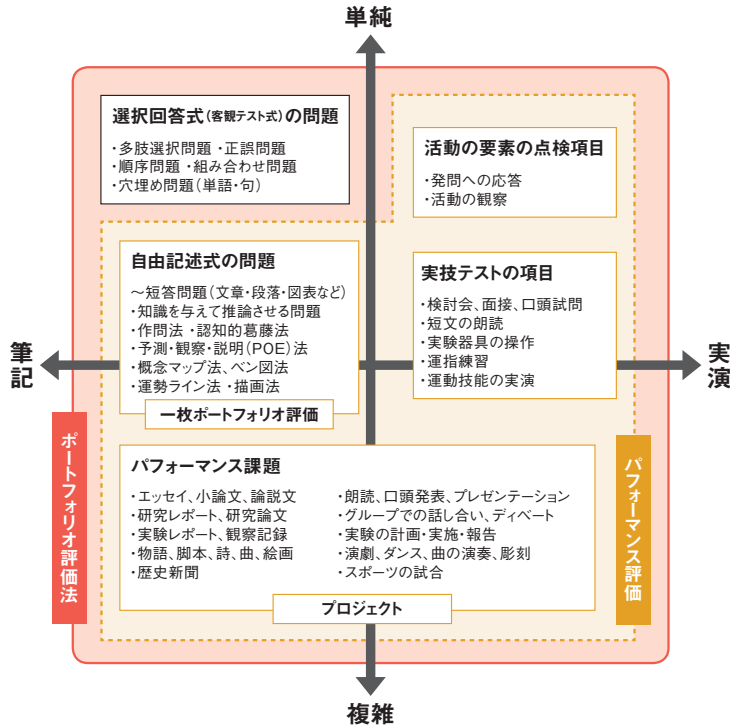
徒の実態を把握されているはず。評価とは特別なことではないのです。

では、探究についてはどう評価し、指導に活かせばいいのでしょうか。探究活動や課題研究の評価で陥りやすいのは、発表会や論文などの最終的な成果物だけで判断しようとする事。けれど、課題の設定によっては簡単に見栄えのいい成果が出せるいっぽう、チャレンジングなテーマの場合、探究は深まっていたとしても、いいアウトプツ



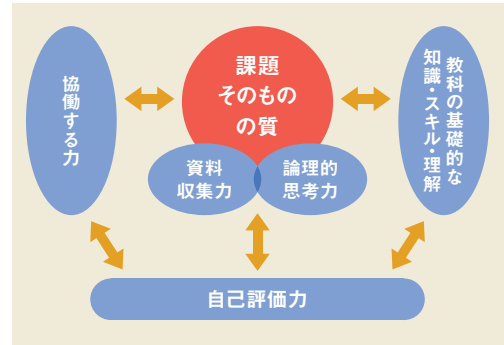


図2 学力評価のさまざまな方法



※「教科と総合学習のカリキュラム設計」(P83)をもとに作図。評価方法を単純なものから複雑なものへ並べるとともに、左側に筆記による評価、右側に実演による評価を示す。パフォーマンス評価とは、知識やスキルを使いこなす(活用・応用・総合)することを求めるような評価方法の総称。

図1 探究力を評価する際の観点



※「教科と総合学習のカリキュラム設計」(P62)の図をもとに編集部で作成。

トが生まれないこともあり得ます。実際、観察を通じて生徒の実態を把握している先生方は、「成果物だけを見て実感とあわないことがある」と口を揃えます。その実感でつかんだところ評価すべきポイント。探究の過程で、適切な力が発揮されていたとすれば、それこそ充実した探究の「成果」です。

過程が大切だといっても、生徒の一部始終を見ている必要はありません。「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」というサイクル

探究って面白い。その子の
こだわりや生き方が見えるから

ポートフォリオ評価法の指導で
大切なのはまず見通しの共有
そう考えたとき、学習者のメモや

こうした「課題そのものの質」に加え、どれくらい充実した情報を集めているか。論理的に思考を組み立てているか。それらが探究における重要な観点になると思います(図1)。

この「課題そのものの質」に加

え、ただ目を眺めても課題の質の高まりがわかるでしょう。例えば、「命が危ないにもかかわらず、なぜ戦っているのだろうか」という疑問が生じ、「エイズ裁判」自分の命よりも大切なものとは何だろうか」という課題に発展していきました。これだけを眺めても課題の質の高まりがわかるでしょう。

を繰り返すなかで、最初に設定した課題よりも、次に設定した課題の質の方が高まってくるはず。新旧の課題(テーマ)を並べてみるだけでも探究の深まりが見えてくるものです。ある中学生の例では、最初は「エイズについて」という漠然としたテーマだったのに、次の段階では「エイズ裁判について」と対象が絞り込まれ、さらに、裁判を戦う人たちの姿に触れるなかで「命が危ないにもかかわらず、なぜ戦っているのだろうか」という疑問が生じ、「エイズ裁判」自分の命よりも大切なものとは何だろうか」という課題に発展していきました。これだけを眺めても課題の質の高まりがわかるでしょう。

ポートフォリオ評価法における指導のポイント(図3)としては、まず教師と生徒が見通しを共有すること。教えられることに慣れている生徒に、「課

記録、時々作品などをまとめ、残しておくことは、学習状況を把握し、課題の質の高まりを示すエビデンスとして重要な意味をもつことがわかります。それがポートフォリオ。そして、教師が、学習者の学習活動を評価するとともに、自らの教育活動を評価する。あるいは学習者が、自らの学習のあり方を自己評価するよう促す。そうしたアプローチがポートフォリオ評価法です。

これまで評価というと主に筆記テストがイメージされてきましたが、それは、「知の構造」の低次に位置する知識やスキルが要素的に身に付いているかチェックするためのもの。生徒自ら課題を設定する探究の評価には適しません。そこで、「真正の評価」、すなわち現実的な状況のなかでの評価を重視する立場から提案されたのがポートフォリオ評価法です(図2)。

図3 ポートフォリオ評価法における指導のポイント

1 見通しの共有

学習者と教師の間で、「なぜ作るのか」「その意義は」「何を残すのか」「どう活用するのか」といった点について、共通理解したうえで取り組み始める。

2 蓄積した作品の編集

資料を整理して目次を作り、「はじめに」や「おわりに」を書いて冊子にまとめるなど、蓄積した作品を編集する機会を設ける。

3 ポートフォリオ検討会

定期的にポートフォリオ検討会を行うことで、学習者にとって到達点や課題、次の目標を確認し、見通しをもつ機会となるだけでなく、学習の成果を披露する場にもなる。

題は自分で設定しろ」と言っても戸惑うだけ。なぜ、探究活動が重要で、

取り組みの過程を蓄積する必要があらのかを共有します。そのうえで、貯

めておくだけでは意味がないため資料を整理、編集する。さらに、対話を

通して教師と生徒が評価のすり合わせを行う「ポートフォリオ検討会」を

定期的実施する。足踏みしている生徒には、「こういうやり方もあるけれど、

どうかな」などと、その子に適した対応策を相談するわけです。1対1の面

談形式が難しければ、グループ別でもいいし、中間発表会などのタイミングで

生徒同士が検討しあうのでもいい。見通しをもつて、次の一歩を踏み出せるよ

うにすることが重要です。

パフォーマンス評価で「深い理解」を保障する

新学習指導要領においては高校での探究として、総合的な探究の時間も

あれば、日本史探究のような教科の探究、さらには教科を横断する理数

探究も登場しました。従来のSSHや専門学科における課題研究もあり、

探究の学習内容によって、評価規準も評価方法も違ってくるのは当然です。

少しややこしいのは、現行の学習指導要領では「教科で習得・活用。総

合で探究」と整理されていたものが、教科のなかにも探究的な要素が入って

きたこと。そこで注目してほしいのがパフォーマンス課題です。これは、知識

やスキルを総合的に使いこなすことが求められる複雑な課題であり、これに

より理解の深さははかりません。例えば、英語でプレゼンテーションをさせた

り、国語で小論文を書かせたり、地歴でレポートをまとめさせたり。教科

で学んだことを総動員して取り組む必要があり、通常の授業と比べてかなり探究的な学習と言えます。

もあって、板書を写す授業だけで、本当に生きて働く知識・技能として定着するかは疑問です。対して、パフォーマンス課題では、活用や探究をしながら、知識・技能がより効果的に習得されることになります。しかも、「知の構造」の中で、より高次にある「転移可能な概念」や「複雑なプロセス」を活用し、それらを総合した「原理や一般化」についての「深い理解」が身に付くことが期待できます。

質の高まりを数レベルで捉えるルーブリック

こうした課題を取り入れるとき、時間不足に加えて不安視されるのが

採点の難しさです。探究活動同様、パフォーマンス課題では、○×の二区分

による採点はなじみません。評価者によって、評価基準にバラツキが生じることもあるでしょう。

そこで、成功の度合いを示す数レベルの尺度と、それぞれに対応したパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表＝ルーブリックが必

要になります。これによって、質の高まりを段階的に見ることができ、それを踏まえたきめ細かい指導も可能になります。

作成にあたり、いきなり評価基準を書くのは難しいでしょうから、試

し、生徒の作品をいくつか並べ、直感でいいので、「素晴らしい」「合格ライン」

「改善が必要」などと分類。それぞれに見られるパフォーマンスの特徴を抽出

することで、各レベルの基準が浮かび上がってくるでしょう。各レベルに対応した典型的な作品(アンカー作

質の高まりをグラデーションで捉える評価基準がルーブリック





品)を添付しておけば、より明確になるはずです。

ルーブリックは各学校の教育目標や生徒の実態を踏まえて作成するものですが、現時点の生徒の実態にあわせた場合、想像の上を行く作品が生まれたとき、評価が頭打ちになってしまう危険もあります。ですから、まずは現状に即して4段階で作成し、それを上回るレベルを想定して5段階目を加えるのもいいかもしれません。

**ルーブリックありきではない
質の低いものならない方がまし**

ルーブリックを作成するには、先生方同士で、さらには生徒や保護者などとも評価基準を共通理解できるメトリックが期待されます。

大学入試でもポートフォリオを見る

時代。ルーブリックを明確化することは、先生方の実感にあった評価基準を大学に対して提案する意義もあるでしょう。

ただし、今、少し懸念しているのは、ルーブリックだけが独り歩きしてしまうこと。繰り返しますが、大事なものは、その教科や探究活動等でどんな力を付けたいか。それには、その力を発揮できる機会が必要です。そのとき、〇×で採点できないことも多いため、力の高まりをグラデーションで捉える評価基準が必要になる。そういう順序であり、ルーブリックありきではないけません。

まして、質の低いルーブリックなら、ない方がましとさえ思います。典型的なのは、探究活動で最終成果物だけを評価対象にし、「発表時の声が大きいか」「わかりやすい図表を使っているか」といった表面的な記述語が並ぶようなルーブリック。それだけでは探究の深まりを評価することなどできません。ですから、探究活動の評価にあたっては、「この子は、こんなこだわりをもって、こういう課題設定をして、こう展

開しました」と丁寧に捉えたうえで、信頼に足る尺度を明確化することが必要なのです。

**生徒の人生が投影されるのが
探究の面白さであり素晴らしさ**

勢いついでに告白しますが、私はかつて、評価研究者と名乗ることに戸惑っていた時期がありました。「評価」という響きが冷たく感じられ、嫌な人間と思われるような気がしていたのです。でも、世の中で生きていくとき、人から何の評価もされないって、とても悲しいことですよ。評価とは本来、人から価値づけてもらえる営み。査定者から価値みされるようなものではありません。

学校の中では、評価＝成績づけのイメージがどうしても強くなりますが、日常、評価という言葉が使われるときって、例えば「私がしたことを評価してもらえた」など、人を愛でる文脈であることが多いはず。そうしたニュアンスが、学校で行われる評価においても、もっと強調されるべきだし、

それが存分にできるのが探究活動だと思ふのです。

評価の勘どころを押さえている先生方は、「子どもの実態を捉え、指導することが楽しい」と話されます。探究においては、課題の質の高まりも大事ですが、自らの問題意識とどうつながっているかが大切なポイント。「この子、こんな事にこだわりがあるんだ」と、実感できたとき、やはりそれは面白いことだと思ふのです。

小学校の総合学習で、本物と偽物の違いをテーマにしたいと言っていた子がいました。「自分は人間として偽物のような気がするから、本物と偽物をどう区別するか知りたい」と言うのです。そこからどんな探究が展開するのか、興味がわきますよね。

鉄道にこだわっていた女の子もいました。聞けば、鉄道会社に勤めていたおじいちゃんが、どんなふうになんてきたか知りたくなったから。涙が出そうになりましたよ。そこに、数字による成績づけはなじみません。

生涯をかけるテーマに出合うところまでいなくても、「自分は、こんな事にこだわって生きていきたい」という事を見つけれれば、素晴らしいこと。学習を通じて自分を見つめる時間があることは、とても価値あることだと思います。

**値踏みされるのではない。
価値づけてもらえるのが本来の評価**